

紀 要

第 1 号

目 次

『紀要』の創刊にあたって

1. 琵琶湖湖底遺跡の調査の現状……………(濱 修)
 2. 近江の地域色の再検討
—弥生時代後期～古墳時代初頭における高坏形土器・器台形土器の実態—
……………(小竹森直子)
 3. 古式土師器研究ノート(1)……………(森 格也)
 4. 竪穴住居に付随するカマドの検討—滋賀県下の検出例から—……………(宮崎幹也)
 5. 衣川廃寺の再検討……………(細川修平)
 6. 穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐって
—穴太廃寺のもつ問題点からのアプローチ—……………(仲川 靖)
 7. 中世土師器皿と生産地……………(横田洋三)
 8. 近江における瓦質土器について……………(奈良俊哉)
 9. 浮世絵にあらわれた煎茶茶碗……………(稲垣正宏)
 10. 魚獲りって難しい—抄網の機能と形態—……………(大沼芳幸)
-
-

1988. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

9. 浮世絵に現れた煎茶茶碗

稲垣正宏

1. 18世紀前半代の煎茶

煎茶法を日本に伝えたのは、黄檗宗の僧隠元降琦とされる。隠元の来日は、承応3年(1654)であるが、明末から清にかけては禅僧の来日はさかんであった。

来日禅僧の出身地は、福建、広東など煎茶のさかんな華南地方が多い(隠元も福建出身)。

煎茶を社会に広めた実践活動家である柴山高遊外の著作『梅山種茶譜略』⁽¹⁾(延享5年 1948年)の中に、高遊外が佐賀の禅寺で修業中の1685~90年代頃、師僧に侍して長崎に行き、唐僧に煎茶の接待を受けた経験が述べられていて、来日した中国僧が、煎茶をたのしんでいたことが分かる。

長崎市に隣接する諫早市の岩下遺跡は⁽²⁾、18世紀前葉から中葉にかけての居館遺跡であるが、この遺跡からは、中国製や日本製の煎茶碗や中国製の茶瓶(土瓶)、水注など煎茶器の出土がみられる。

正徳二年(1712年)の自序のある寺島良安の『和漢三才図会』⁽³⁾には「^{そめつけちやわん}絵茶碗」という項目がある。「^{そめつけちやわん}絵茶碗」は磁器で、中国産と伊万里産があり、煎茶に向くとされている。

『和漢三才図会』には「^{ちやわん}茶盞(抹茶碗)」という項目もあり、そこに描かれた茶碗は、すべて陶器である。

宝歴6年(1756年)に刊行された日本最初の煎茶書である大技流芳の『青湾茶話』⁽⁴⁾には煎茶碗にふさわしいものとして、「嘉靖、宣徳、成化などの製(青)白磁にしくものはなし。」としながら、「煎家は、肥州(肥前)より焼出す伊満里磁器を用ゆべし、茶盞は大なるは悪し、今俗に云うちよくというところの小茶盞よし、焦渴して大飲する類に同じからず」とあり、伊万里焼(有田焼)染付小茶盞が紹介されている。

染付磁器の主要な産地である肥前においては、18世紀中頃までは上述のように猪口と煎茶碗の区別がおこなわれておらず、両方を兼ねた小盞が生産されていたようである。

一般生活の面では、18世紀の初頭頃までは室町時代からの伝統を引く抹茶が日常的に飲まれており、境内などの茶見世で客に供せられているのも、大半が抹茶である。

2. 18世紀中頃から後半にかけての煎茶

隠元が来日する以前に既に煎茶的なものがあったらしいことは、文献資料等から推測することができる。「煎茶」という用語も平安時代に初源がある。

しかし、街頭の煎茶売の元祖的存在になると、16世紀初め頃に成立した『七十一番職人歌合』⁽⁵⁾にみられる「せんじ物うり」まで時代は下がる。この「せんじ物」とは『歌合』に伴う歌や判定文から推測して、「せんじ薬」のことらしい。

風炉にまきをくべ、釜で煎じ、薬湯をひしゃくをつかって、茶碗に汲み入れているところなど、江戸時代の煎茶売にそっくりである。

この「せんじ物うり」がいつ「煎茶売り」に替わるのか、川上行蔵氏⁽⁶⁾の研究によると、寛永年代(1624～1643年)以降に煎茶は出現する。寛文8年(1668年)に刊行された『料理塩梅集』には、茶の煎汁で米を炊いた奈良茶漬飯も登場する。と、している。

しかし、伊藤うめの氏⁽⁷⁾の研究では、高級茶屋や遊里では江戸初期から煎茶が飲まれていたとしている。一般レベルで煎茶が飲まれた時期については、隠元の来日の以後であるのか、江戸初期であるのか、はっきりしない。

元文3年(1738年)宇治湯屋谷の永谷宗七郎は、自ら考案した緑茶を江戸に運び、日本橋山本嘉兵衛の店で売り出した⁽⁸⁾。それまでの煎茶は、現在のウーロン茶のような褐色系の茶色をしており、それがあざやかな緑色に変わったのであるから、緑茶は大いにもてはやされた。江戸では煎茶の茶見世が浅草を中心にあらわれ、それまで茶見世の主流であった抹茶の茶見世にとって変わっていった。

江戸の煎茶ブームをさらに助長させたのは水茶屋(茶見世)で客を接待する茶汲女の活躍である。宝暦年間(1751～63年)、浅草二十軒茶屋や京都祇園では、後世に名を残した名物茶汲女が輩出している。⁽⁹⁾

明和年間(1764～1780年)には江戸笠森稻荷の水茶屋に「笠森おせん」が現れた。「笠森おせん」は鈴木春信の浮世絵に描かれ、江戸中の人気物になった。

3. 煎茶碗の生産

水茶屋が繁盛し、家庭でも煎茶を飲む習慣が広まると、煎茶碗の需要が増え、陶磁器生産地では、大量生産をはじめた。

佐賀県西松浦郡有田町の広瀬向2号窯⁽¹⁰⁾、小樽2号新窯⁽¹¹⁾、伊万里市権現谷窯⁽¹²⁾などでは、18世紀後半から煎茶碗を大量に生産している。第1図の編年表からも、1780年代頃から典型的な煎茶碗が生産されだしたことがよくわかる。

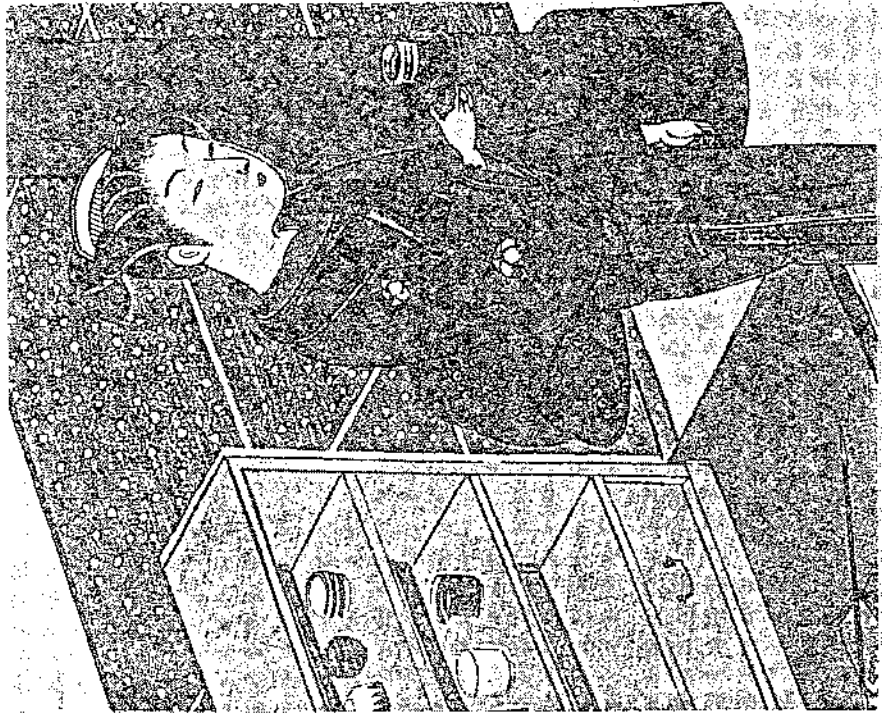
第4図は、東京都文京区の白山四丁目遺跡⁽¹³⁾から出土した白磁染付煎茶茶碗である。このうち148、161、213、245、246、247、249、257、346は口縁部外面に「雨降柳文様」が描かれているが、この文様の茶碗は、「笠森おせん」の茶見世に見られ、また黒本「新版出雲お国芝居始」の挿図にも描かれている。

「雨降柳文様」の茶碗は、都立一ツ橋高校⁽¹⁴⁾地点でも出土している。いずれもやや厚手で熱い茶を飲むのに適している。胎土は半磁器かと思わせるほど鉄分が多く、文様も単純なところから、1個あたりの値段も安そうで、水茶屋などで消耗品的に使うのに適した茶碗といえるが、生産窯は不明である。

寛政年間(1789～1800年)になると浅草の水茶屋に「難波屋おきた」が現れる。「難波屋おきた」は、喜多川歌麿の浮世絵に描かれ評判となり、「笠森おせん」に比肩する人気を呼んだ。

種別 位置	青磁染付 A-1類 ① コニヤク	青磁染付 A-3類 ② コニヤク	青磁染付 白類 ③ コニヤク	青磁染付 小丸類 ④ コニヤク	青磁染付 高脚碗 ⑤ コニヤク	染付 丸類 ⑥	染付 縮形碗 ⑦	染付 広葉形碗 ⑧	染付 広葉形碗 ⑨	染付 縮形碗 ⑩	染付 細反碗 ⑪	染付 小丸碗 ⑫	関連資料
青磁染付 A-1類 ① コニヤク	青磁染付 A-3類 ② コニヤク	青磁染付 白類 ③ コニヤク	青磁染付 小丸類 ④ コニヤク	青磁染付 高脚碗 ⑤ コニヤク	染付 丸類 ⑥	染付 縮形碗 ⑦	染付 広葉形碗 ⑧	染付 広葉形碗 ⑨	染付 縮形碗 ⑩	染付 細反碗 ⑪	染付 小丸碗 ⑫	関連資料	
青磁染付 A-1類 ① コニヤク	青磁染付 A-3類 ② コニヤク	青磁染付 白類 ③ コニヤク	青磁染付 小丸類 ④ コニヤク	青磁染付 高脚碗 ⑤ コニヤク	染付 丸類 ⑥	染付 縮形碗 ⑦	染付 広葉形碗 ⑧	染付 広葉形碗 ⑨	染付 縮形碗 ⑩	染付 細反碗 ⑪	染付 小丸碗 ⑫	丸皿Aは1793年 熊本県杯の窯業 遺跡で出土。 染付帯花紋文柄 彩碗は1807年迄 出土。	
青磁染付 A-1類 ① コニヤク	青磁染付 A-3類 ② コニヤク	青磁染付 白類 ③ コニヤク	青磁染付 小丸類 ④ コニヤク	青磁染付 高脚碗 ⑤ コニヤク	染付 丸類 ⑥	染付 縮形碗 ⑦	染付 広葉形碗 ⑧	染付 広葉形碗 ⑨	染付 縮形碗 ⑩	染付 細反碗 ⑪	染付 小丸碗 ⑫	染付は寛政期で 1819年産器あり	
青磁染付 A-1類 ① コニヤク	青磁染付 A-3類 ② コニヤク	青磁染付 白類 ③ コニヤク	青磁染付 小丸類 ④ コニヤク	青磁染付 高脚碗 ⑤ コニヤク	染付 丸類 ⑥	染付 縮形碗 ⑦	染付 広葉形碗 ⑧	染付 広葉形碗 ⑨	染付 縮形碗 ⑩	染付 細反碗 ⑪	染付 小丸碗 ⑫	簡形碗は文化 (1804-1817) ころ以降産すとい う(守貞謄稿)	
青磁染付 A-1類 ① コニヤク	青磁染付 A-3類 ② コニヤク	青磁染付 白類 ③ コニヤク	青磁染付 小丸類 ④ コニヤク	青磁染付 高脚碗 ⑤ コニヤク	染付 丸類 ⑥	染付 縮形碗 ⑦	染付 広葉形碗 ⑧	染付 広葉形碗 ⑨	染付 縮形碗 ⑩	染付 細反碗 ⑪	染付 小丸碗 ⑫	小輪2号新瓦で 1824年産皿と碗 産器が伴々。	
青磁染付 A-1類 ① コニヤク	青磁染付 A-3類 ② コニヤク	青磁染付 白類 ③ コニヤク	青磁染付 小丸類 ④ コニヤク	青磁染付 高脚碗 ⑤ コニヤク	染付 丸類 ⑥	染付 縮形碗 ⑦	染付 広葉形碗 ⑧	染付 広葉形碗 ⑨	染付 縮形碗 ⑩	染付 細反碗 ⑪	染付 小丸碗 ⑫	染付産器で 1841年産器と 1846年産器が有。	
青磁染付 A-1類 ① コニヤク	青磁染付 A-3類 ② コニヤク	青磁染付 白類 ③ コニヤク	青磁染付 小丸類 ④ コニヤク	青磁染付 高脚碗 ⑤ コニヤク	染付 丸類 ⑥	染付 縮形碗 ⑦	染付 広葉形碗 ⑧	染付 広葉形碗 ⑨	染付 縮形碗 ⑩	染付 細反碗 ⑪	染付 小丸碗 ⑫	小丸碗B類は文 化以降に用いら れる(守貞謄稿)	

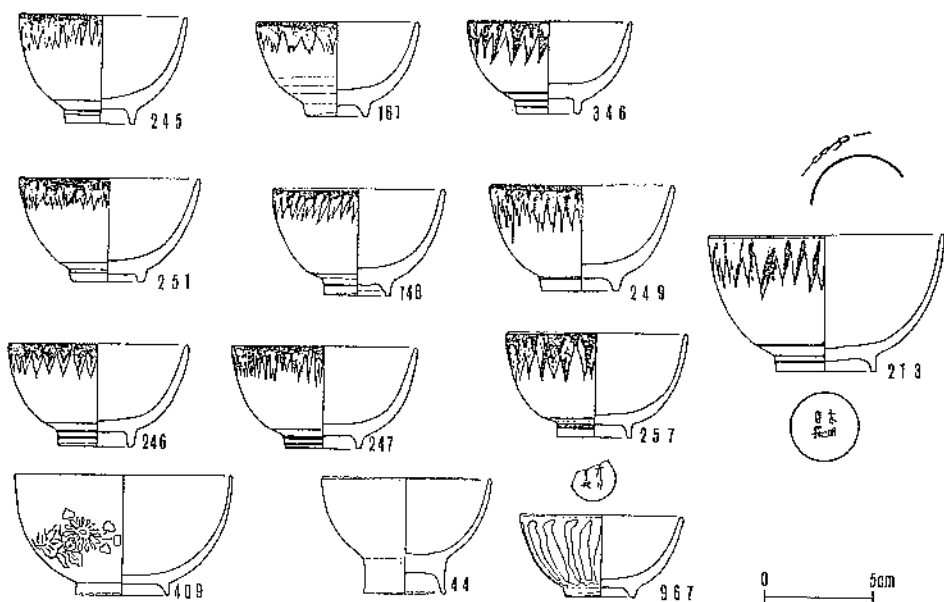
第1図 広瀬向2号窯の主な碗の変遷図



第3図 鈴木春信「笠蒸おせん」



第2図 「新版出雲お国芝居始」挿絵 明和二年（1765年）刊



第4図 白山四丁目遺跡出土遺物



今製茶壺小形也 舶來の藤を割て
編み製す

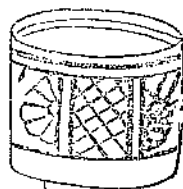
筒茶碗より大形に厚く高くし密なる藍繪をかき精製なる者あり湯飲と號く湯のみに非ず専ら自己の茶用とし客には用ひず茶見世にては客に專用す

口徑二寸
一二分



文化以來より小形にて圖の如きを三都とも専用す始の煎茶燕行れ用之しより今は平日用も専之

筒茶碗
同上



文化比迄は上の二品を専用す筒茶わんは下品用也



茶壺先年は木製黒漆大形也

朝顔
形茶
碗



口徑二寸六七分外准之

茶碗 茶を飲の碗は茶碗と云こと勿論なるを今俗磁器の飯碗をも茶碗と云に依て茶用には「茶のみ茶わん」飯用には茶漬茶碗と云也蓋あり茶用は無蓋也

第5図 守貞漫稿 (部分)



第6図 七十一番職人歌合「せんし物うり」

4. 19世紀代の煎茶

19世紀になると煎茶の需要はますます増えて、従来の産地肥前に加えて、瀬戸、美濃地方でも煎茶碗の生産が始まっている。『尾張志』（天保5年刊 1934年）編纂の際の調査資料と伝えられる『瀬戸史料全』⁽⁴³⁾に「せんじ」と称する茶碗の絵が載っている。この絵と全く同じ茶碗が瀬戸市の岩右衛門窯、壱兵衛窯⁽⁴⁴⁾などから出土している。これらの「せんじ」碗は陶器である。

肥前産の煎茶碗の中にも、前代とは違った形のものが現れる。口縁端部が外反するもので、第1図の染付端反碗がこれにあたる。

第5図は、喜多川守貞作の『守貞漫稿』⁽⁴⁵⁾（嘉永6年 1853年）の茶碗という項目であるが、ここには、いろいろと興味深いことが述べられている。

大橋康二氏は、「朝顔形茶碗」を第1図の染付小丸碗A・I類に、「筒茶碗」を染付筒形碗に、「口径二寸一、二分」の碗を小丸碗B類に比定している。

19世紀前葉頃の浮世絵の中には『守貞漫稿』に描かれた「口径二寸一、二分の茶碗」や、「口径二寸一、二分の茶碗」と形は同じで「筒茶碗より大形に厚く高くし密なる藍絵をかき精製なる者」や、「染付端反碗」が描かれている。

また、この時期の浮世絵には、自分専用として用いられている煎茶碗が多く描かれている。

5. ま と め

浮世絵など絵画資料を扱うとき、その写実性をどの程度まで評価することができるのか検討を要する課題だと思われる。本論においては、発掘調査によって得られた考古資料により、絵画資料を検証しようと試みたが、著者の「力」不足によりその目的は十分にはたされなかった。本論を省みて、重要な点をあげてまとめに替えたい。

第1は中国から江戸初期に渡来した華南地方で流行していた煎茶と中世以来の「せんじ物うり」の伝統を引く煎茶の関係である。中国では明代にはすでに茶瓶（急須、土瓶）が考案されていた。万福寺には隠元の使った茶注と称するものがあり、諫早市の岩下遺跡からは中国製の茶瓶も出土している。

このように中国から伝わった煎茶は、沸した湯を茶注に汲んで淹す「淹茶^{だしちや}」であったわけである。しかし日本では、第2図でも分かるように18世紀後半に至っても、煎茶は「せんじ物」のように釜で煮られている。これは「煮茶^{にちや}」というべきだろう。

今日でも、緑茶のような「淹茶」と番茶、麦茶のような「煮茶」が併存しているが、両者の関係については、別稿でくわしく追求してみたい。

第2に、煎茶にとって、18世紀中頃という時期は、大飛躍の時期であったわけで、本論では、緑茶の考案など煎茶史上の史実をもって飛躍の根拠としているが、たとえば、茶汲女の艶姿を世に広めた浮世絵師達の役割りも大きく評価すべきだろう。女芝居のない時代、茶汲女は今日のアイドルスターなみの人気を有し、また、煎茶を世に広めるコマーシャルタレントたり得たのも浮世絵師の力に寄るところが大きいと思われる。

注

- (1) 柴山高遊外『梅山種茶譜略』（日本の茶書 2 平凡社 東洋文庫206 1972年）
- (2) 田川肇、福田一志、村川逸朗『岩下遺跡』（九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書IV—長崎県文化財調査報告書第69集 長崎県教育委員会 1984年）
- (3) 寺島良安『和漢三才図絵』（島田勇雄、竹内淳夫、樋口元巳訳註 平凡社 東洋文庫462 1986年）
- (4) 大枝流芳『青湾茶話』（日本の茶書 2、平凡社 東洋文庫206 1972年）
- (5) 『七十一番職人歌合 廿五番 せんじ物うり』（群書類従第拾九輯）
- (6) 『図説 江戸時代食生活事典』（日本風俗史学会 雄山閣 1978年）に所収
- (7) 同上書に所収
- (8) 同上書による。
- (9) 佐藤要人『絵本 水茶屋風俗考』（有光書房 1977年）本論の水茶屋に関する論述は、『絵本 水茶屋風俗考』によっている。
- (10) 『南川原窯ノ辻窯、広瀬向窯』（一肥前地区古窯跡調査報告書 第3集—佐賀県立九州陶器文化館 1986年）
- (11) 『小樽 2号窯』（有田町教育委員会 1986年）
- (12) 盛峰雄『権現谷窯跡—伊万里市大河川町所在、近世古窯調査報告書第19集 伊万里市内古窯跡調査報告第3集』（佐賀県伊万里市教育委員会 1986年）
- (13) 『文京区白山四丁目遺跡』（白山四丁目遺跡調査会 1981年）
- (14) 『近江のやきもの』五藤美術館 1984年
- (15) 仲野泰裕『江戸時代の瀬戸焼と京焼風陶器』（愛知県陶磁資料館研究紀要 6 1987年）
- (16) 池本正明、谷口雅夫、藤沢良祐、松澤和人『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要IV』（瀬戸市歴史民俗資料館 1987年）
- (17) 喜多川季荘『類聚近世風俗志 原名守貞漫稿』（名著刊行会 1979年）

挿図の出典について

- 第1図 大橋康二『南川原窯ノ辻窯、広瀬向窯』（一肥前地区古窯跡調査報告書、第3集—佐賀県立九州陶磁文化館 1986）
- 第2図 鳥居清長、黒本『新版出雲お国芝居始』の挿図（江戸の絵本 第1巻 国書刊行会 1987）
- 第3図 鈴木春信『笠森おせん』（浮世絵大系 2 春信 集英社 1975）
- 第4図 『文京区白山四丁目遺跡』（白山四丁目遺跡調査会 1981）
- 第5図 喜多川季荘『類聚近世風俗志 原名守貞漫稿』（名著刊行会 1979）
- 第6図 『七十一番職人歌合廿五番』群書類従第拾九輯

編集後記

年度当初に、これまであまり活発でなかった文化財愛護のための普及啓発事業について、今年度からはより充実したものを計画せよと命ぜられた折り、各種の展示会などの一般向けの事業のほかに、専門知識の普及啓発を兼ねて財団職員の普段の研修の成果を公表できるよう『紀要』の発刊を試みることにした。10名程度の論考を掲載することとしたが、実のところ、あまり原稿が集まらないのではないかと不安であった。しかし、これは取り越し苦労で、希望者を募ったところ即座に10名の申し出があり、職員の隠れた研究意欲を垣間見た次第であった。本年は創刊の年でありますが、初心を忘れることなく続けたいものと思う。

(普及啓発事業担当)

昭和63年3月 初版
平成4年3月 2刷
平成6年3月 3刷

紀 要 第 1 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781
印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241